

○東京都多摩市

多摩市教育委員会教育指導課
統括指導主事 山本 勝敏

みんなで描く未来、みんなで創る未来 ～ ESD(持続発展教育)を通して ～

1 多摩市ってどんなまち？

多摩市は、東京都心から電車で約30分の東京都西部に位置する。人口は約148,000人で、市制が施行された昭和46年以降、市の南部を中心に多摩ニュータウンが形成され、全国から集まった多くの人々が、様々な価値観を共有しながら「新しいまち」づくりを進めてきた。

それから40年以上が経ち、住民の高齢化や団地の老朽化等、様々な課題も抱えているが、現在、市民が身体面の健康だけでなく、それぞれに生きがいを感じ、安心・安全に暮らすことができ、子育て中であっても、障害があっても、高齢者から子供まで誰もが幸せを実感できるよう、「健幸都市」(スマートウェルネスシティ)を目指し、持続可能なまちづくりを推進している。

【将来都市像】

みんなが笑顔 いのちにぎわうまち 多摩



まち全体がまるで公園
季節を感じて心豊かに



緑豊かな丘陵地に囲まれた
「東京のベットタウン」



歩車分離の道路で
安全に安心して出かけ

2 多摩市の教育とESD

多摩市では、平成21年から「2050年の大人づくり」をスローガンにESDを重点事業とし、身近にある環境や地域を学びのステージとして、多摩市のよさを知り、考え、将来・未来に伝えることのできる、多摩の創造に貢献する人材の育成を学校・家庭・地域の連携の下に推進してきた。現在、市内の全小・中学校26校がESDの推進拠点であるユネスコスクールに加盟し、各学校の特色や地域性を生かしたESDを実践している。

3 多摩市のESDの実際

(1) スタートは環境教育の視点から

以前から市内の学校では、環境教育の視点から夏期にゴーヤを植えて日よけにする試みを始めており、これを「グリーンカーテンプロジェクト」として多摩市の農業委員会の協力の下に全校に展開し、地球温暖化の防止に向けたESDの取組をスタートさせた。

(2) 震災を契機として「持続可能な発展」を大切な課題に

東日本大震災と原子力発電所の事故を契機に、「GO-YA action TAMA」をキャッチフレーズとして、中学校では市民に節電を呼びかけるポスターを作成したり、ユネスコスクールとして交流を深めていた被災地である気仙沼市の学校への支援活動を行ったりするなど、子供たちを中心に、ちょっとした行動の積み重ねから「持続可能な発展」が実現できるよう、各学校で様々なESDの取組が展開された。

(3) 人や社会との「関わり」「つながり」を大切にESDに

ESDを通じた「持続可能な社会の担い手」、ひいては「未来の地域社会の担い手」の育成に向けて、多摩市では学校・地域・家庭の連携を教育の柱としながら、企業・大学・行政機関・市民団体（NPO）との連携・協働の下に子供たちを育てていこうとする流れが生まれてきている。「ESDコンソーシアム」や実践発表の場である「子どもみらい会議」などの取組が、新たな人や社会との「関わり」「つながり」を生み出し、各学校のESDを一層充実したものにしている。



4 子供の学びを地域づくりにつなぐ

各学校は、ユネスコスクールとして環境、国際理解、エネルギー、防災、平和、福祉、人権等の社会の様々なテーマを取り上げ、身近にある環境や地域（多摩市）を学びのステージとして、子供たちが「親しむ・知る・考える・創る」活動を展開している。こうした子供たちのESDを通じた学びを、学校教育を超えて地域づくりにつないでいくためには、ESDの学びに広がりをもたせ、「ESDコンソーシアム」や「子どもみらい会議」により子供の学びを大人と共有し、互いに関わり、つながりながら、「多摩市が好き」といった地域への愛着をもつようにすることが必要である。具体的には、学校林をみんなが親しめる森にするために調べることによって、多摩市の自然の豊かさを「発見する」。また、エレベーターのない団地の課題を捉え、高齢者宅を訪問してごみ出しのボランティアをすることによって地域住民と「つながる」。さらに、地元の商店街の課題に対し、フリーマーケットやスタンプラリーなどの解決策を企画・実行することによって地域を「創る」。これらの子供たちの主体的な学びが、子供も大人もみんなで作るまち「多摩」へとつながっている。

5 みんなで描く未来、みんなで創る未来に向けて

今後のESDの課題として、①SDGsを踏まえた取組の推進、②コミュニティ・スクールの導入と地域学校協働活動の推進、③ユネスコスクールのグローバルなネットワークの活用がある。

